校内研修資料　（スクールカウンセラーによる作成資料）　平成22年10月18日（月）

Ⅰ．スクールカウンセラーの業務

・スクールカウンセラーは何をするか
・どのような人がスクールカウンセラーになっているか

１．学校の一員としての立ち位置

・子ども・保護者の側により近い存在、相談者が本音を語れる存在

＊＊子育てに関する基本的な姿勢＊＊
・小学生については、守り育てる姿勢
　親なしでは生きられない
・中学生については、人生の先輩としての姿勢
　子どもの価値観の尊重
＊＊子どもへの期待の仕方＊＊
・子どもは親とは別の人格であるという前提に立つ
・異なった価値観を容認できる大人らしさを示す
・子どもの人権を認めつつ個々の家庭事情を考慮した将来像の構築
・子ども一人ひとりにとっての幸せな人生への展望と支援

２．カウンセリング・マインド

・傾聴、受容　　・信頼される存在　　・自己開示への心構え

３．チームで援助

・情報の共有、組織内秘　　・ケース会議　　・校内支援体制の構築

４．ケース別　対応・対策

①不登校への対応について
・考えられる要因
　集団になじめない。
　学習についていけない。
　体力が不十分である。
　学習内容に関心が持てない。
　親の期待等、必要以上のプレッシャーを感じている。
　「いじめ」や「いやがらせ」を受けている。
　家庭の「教育力」、「経済力」、「環境」に学業を阻害する要因がある。
・子ども自身に「なぜ？」「どうして？」学校に来られないのかと問うことについて
　上記の要因が複合的に作用していることが多く、子どもの答えから原因・理由を見つけることは難しい。
　子どもの返答は場当たり的であり、経過をとらえることが難しい。
　わけがわからないまま、身体症状になって表れることも多い。
　恥ずかしさや心配を避けて、語れないこともある。
　無理に言わせることで、さらに子どもを傷つけることもある。
・問題解決に向けてのステップ
　アセスメントと、必要に応じたケース会議。
　共通理解と役割分担。
　経過報告、情報交換。
　個に応じた柔軟な対応。

・保護者へのケア
焦り、いら立ち、苦情への対応。
カウンセリング。
パートナーシップの形成。

②集団不適応への対応について
・考えられる要因
友達ができない。
ソーシャル・スキルの不足。
いじめを受けている。
プライドが傷ついている。
自己肯定感が低下している。
・問題解決に向けてのステップ
子どもの思いを共有する。
個を大切にする関わり方を心がける。
個々の子どもの立場で、生い立ち・環境・経験について考えてみる。
発達障害や成育環境に問題がある場合を念頭に置く。
保護者の発達障害が認められる場合もある。
アセスメント、支援計画の作成。
カウンセリング。
保護者の理解と協力を得る。
情緒を安定させ、自己肯定感を育て、成長へのエネルギーにする。

＊＊子どもが元気に成長するためのキーワード＊＊
守られていること
愛されていること
褒められること
人の役に立つこと
人に必要とされること

・周りの子ども達への配慮
人権の尊さへの理解と正しい行動は、しつけ・教育と経験を基にして育つ。
愛情に包まれて大切に育てられた子どもには人の温かさがわかる。
大切にされた経験や記憶がない（少ない）子どもには、人への思いやりの心が育ちにくいことがあるり、自己防衛的な態度が見られる。
援助資源となる『なかま』の発見、育成。

③発達障害が疑われる生徒への対応
・適切な時期に発達診断を勧める。
・特別支援の方法を検討し、実践する。
・保護者への情報提供とカウンセリング、
子どもの長所、伸ばしていきたい才能について、共通理解を持つ。
本人の長所、特技など、プラスの資源を活かして成長につなぐ。
子どもの成長は親の喜び。他の生徒との不要な比較をしない。
子どもは親の思い通りにはならない事が多いと知らせる。
子どもへの思いの伝え方にも工夫が必要。
将来への不安に寄り添い、支援する。

学校教育におけるカウンセリング・マインド

1　一般的な意味

子どもは、先生や親、友達に関心をもたれたい、認められたい、尊重されたい、理解されたいという欲求をもっていて、その欲求が満たされると、自分でよりよい方向へ成長していく。このような子どもの成長する力を深く信頼し、あらゆる場で一人ひとりに関心をもち、認め、尊重し、理解しようとする態度や心構えをカウンセリング・マインドという。カウンセリング・マインドは子どもと教師の心理的距離をつめる役割を果たす。

（1）肯定的配慮

子ども一人一人の気持ち、感情、考え方を尊重することであり、積極的尊重ともいわれる。

（2）　共感的理解

子どもの気持ち、感情をありのままに共感的に理解しようとする態度。

（3）　純粋性

教師が子どもに裏表のない態度、偽りのない心で接することである。自己一致ともいわれる。

（4）中立性

教師が自分の意見を頭から相手に押しつけたり、強制したりしないで、中立の立場をとることである。

（5）傾聴、受容

クライエントの話に積極的な関心を示し、心から聴き入る態度と相手の感じ方や考え方、気持ちなどを、評価を行わず、ありのままに好意的な気持ちをもって受け容れる、尊重しようとする態度。

2　学校教育におけるカウンセリング的関わりの場

（1）授業の中の学習支援
（2）治療的な個別の学習支援
（3）学級活動・学校行事での社会的支援
（4）進路指導等でのキャリア・カウンセリング
（5）不登校児や多様な心理的障害児の治療的カウンセリング
（6）社会的規範意識や生き方に関する教育的指導

3　発達課題を見るポイント

子どもの問題には、発達課題のつまずきが潜んでいることが多いし、発達課題の解決を支援することが専門的カウンセリングでは求められる。

（1）子どもの生得的特質とその子をとりまく環境とがミスマッチしていないか。
（2）子どもを心理的に支えるサポートシステムが家庭や学校などで作られているか。
（3）社会のルールにそって自分の欲求をコントロールする力を身に付けているか。
（4）他人のイメージではなく、自分のイメージを持ちながら生活や学習などの活動を行っているか。
（5）自分の能力の個性に気付き、それに自信を持とうとしているか。
（6）自分の生きる条件を理解し、それをふまえた生き方を見つけようとしているか。

4　カウンセリングの基本スキル

（1）受容：許容的な雰囲気の中で、相槌を打ちながら聞く。
（2）支持：相手の気持ちを承認する。
（3）繰り返し：話のポイントをつかまえて投げ返す。
（4）明確化：クライエントがはっきり意識化できていないことを言語化してあげる。
（5）質問：相手の話をリードするために投げかける。